

# 関東の伝統的都市の地域特性

川越と佐原を中心に

上野和男

## ①問題

この報告では、川越と佐原という二つの都市を比較して、関東の伝統的都市の地域特性について考えてみたいと思います。先ほどの小林忠雄氏報告「マチ場の感覚表現と民俗―板橋を中心に―」を聞いて、都市の「地域特性」という言葉の使い方にズレがあると感じました。私は社会学的な社会組織の研究をしておりまして、都市も多少研究をしています。社会学では都市を研究するときに、都市性（アーバニズム）という言葉をよく使います。小林報告で言われた「マチ場」の民俗というのは、私の言葉でいうと都市性アーバニズムになると思います。板橋の個別の都市としての特徴が、ここで問題とする都市の「地域特性」になると思います。都市性と都市の地域特性という言葉をどのように使い分けるのか。地域特性と似た言葉に「地域性」という言葉があります。地域性との違いを考えながら、都市の地域特性という概念を提示しました。これらの点も含めて、この機会に報告したいと思います。

そもそもこの共同研究が始まった契機は、これまでの都市史研究において、三都（東京、大阪、京都）以外の都市、すなわち名古屋などの中部地方の都市についての研究が希薄だったことです。名古屋を中心とす

る中部地方には、ほかの地域とは異なる民俗や文化が認められます。これを、中部地域の地域特性として理解したいというのが、この共同研究の出発点であります。たとえば、名古屋を中心とする地域では、「名古屋嫁入り」などの変わった習俗が農村・都市を通じてあります。これは、私の考えでは、嫁（女性）を送り出す側の社会的地位が低く、その結果として色々な贈物をしたり、派手な結婚式をしたりするのだと思います。それから北陸では、毎年暮れになると女性側から男性側に鯛を贈るの習俗があります。これら一連の習俗は、女性の地位の低さ、あるいは実家（嫁を送り出す）側の社会的地位の低さによるものと考えることができると思います。「名古屋嫁入り」は農村・都市で共通に行われていることです。これらを含む形で中部地方の伝統的都市の地域特性は何かという点にアプローチしてはどうか、と考えたわけです。これまで歴史学でも三都の研究は行われていましたが、名古屋の研究はきわめて少ない状況にありましたので、民俗学、社会学、歴史学などの学際的共同研究によって伝統的都市の地域的な特性を明らかにしようと考えたわけです。

最初の照準は中部地方、特に名古屋にあったのですが、フィールドワークの可能性などを判断して、本研究では、名古屋を諦めて下総地方に研究対象地域を移す形になりました。しかしながら、考え方の基本と

しての都市の地域特性を明らかにするという研究目標はこれまで通りであります。関東地方の東部に位置し、江戸（東京）と密接な関係を持ちながら発展してきた下総地方の伝統的・地方都市がどのような特性を持っているか、それを明らかにしたいというのが、この共同研究の目標とするところです。

この報告では、最初に地域性と地域特性の概念について述べたいと思います。そして、川越と佐原という関東地方の伝統的・地方の地域特性を都市祭礼を中心に述べたいと思います。そして、この二つの都市の比較をとおしてその共通性と差異、およびその要因について、お話ししたいと思います。

## ②「地域性」と「地域特性」

### (一) 地域性論と地域特性論

わたしは、大学時代から日本の社会組織の地域性について研究してきました。『国立歴史民俗博物館研究報告』三五集（一九九一年）にも「日本の地域性研究における類型論と領域論」という地域性研究の動向を紹介する論文を書きました。私は地域性論と地域特性論を区別して考えております。地域性論とは、日本社会や日本文化を地域類型や領域を設定して理解しようとする方法であると考えます。地域性論について、かつてわたしは次のように記述したことがあります。「日本社会ないし日本文化の地域性研究（地域性論）とは、日本の社会・文化の地域的な多様性を前提としながら、これを単一のものとしてではなく、いくつかの類型（理念型）や領域を設定して理解しようとする研究の方法論である。この意味での地域性論は、単なる各地域ごとの個別的な地域的特性を問題とする研究ではなく、日本社会ないし文化の全体的な地域的構造を考察する研究である。地域性論は地域の社会や文化を個別に問題とする地

域社会論や地域文化論ではなく、日本社会論ないし日本文化論のひとつなのである」（上野和男一九九一「日本の地域性研究における類型論と領域論」『国立歴史民俗博物館研究報告』三五集、二四一―二七〇）。

要するに、基本的には日本の社会や文化を単一のものとして考えるのではなくて、社会の構造や文化が地域的に異なっているという視点で、日本社会や文化を研究しようとする立場を地域性論と呼んでいます。これまでも明らかにされているように、餅が丸いか四角いか、雛人形の内裏様を右に飾るのか左に飾るのか、など地域的な違いはたくさんあります。地域性論は、あくまでも日本社会論や日本文化論の一つとして、地域的な違いに注目しながら、それらを明らかにしようとする研究であります。地域性論はさまざまな分野で提示されており、また、地域性論のなかにもさまざまな考え方がありますが、私の立場は異質論的な立場であります。よく比較される関東と関西でも、それぞれの地域の特質なのであって、どちらが古いか、どちらが新しいとか、どちらが基本であるとか、は言えないと考えています。そのような異質論の立場から私は日本社会ないし文化の地域性を明らかにしようと考えています。

このような私の地域性論については、前述しました「日本の地域性研究における類型論と領域論」（上野和男一九九一）で論じました。日本の地域性論は、大きく「地域類型論」と「地域領域論」に区分されます。地域類型論は日本の社会構造や文化についていくつかの類型を設定して、その構造的変差を説明しようとする研究であります。家族、親族、村落社会などについていくつかの類型をまず設定し、これを地域的差異として理解しようとする地域類型論の考え方です。たとえば、戦後いち早く提示された福武直（一九四九）の同族型村落と講組型村落、蒲生正男（一九六〇）の東北日本型村落と西南日本型村落などの日本の村落構造の二類型論は、地域類型論であります。

一方、地域領域論というのは、地理的にどこからどこまでの地域がど

のような文化的社会的特徴を持っているか、一定の領域を設定して考えようとする考え方です。この研究ではまず、個々の文化要素の地域的分布を明らかにすることが必要となります。一定の文化要素の地域差の解明が地域領域論の目標であり、これによってさまざまな地域区分と多様な文化領域がこれまでに提示されてきました。最近、考古学でも地域性の議論が盛んですが、考古学で行われている地域性の議論は、まず分布を明らかにした上で、どういうことができるか、を議論されていると思います。これは私の言う地域領域論です。地域領域論に含まれるこれまでの研究としては、文化人類学の文化領域論〔NAGASHIMA, N. and H. TOMOEDA eds. 1984〕、米山俊直〔一九八九〕の「小盆地宇宙論」などがあります。

地域性論には、大きくいえばこのような二つの考え方があります。先ほどの拙稿を書く契機になりましたのは、地域性論のなかで立場の違う人たちが、混同して議論をしていることに気づいたことです。そこで、地域性研究における類型論と領域論を自分なりに整理してみようとしたわけです。

このような地域性論に対して、ここでいう地域特性論とは、日本の社会や文化についての全体的な議論ではなく、特定地域の個別的な社会や文化についてその地域的な特性を明らかにしようとする研究であります。たとえば、川越の都市としての特性は何か、あるいは佐原の特性は何か、あるいは対馬の社会組織の特性は何か、対馬と壱岐の違いは何か、などを考えて行くのが地域特性論であります。この地域特性論は地理学の地域論の考え方に近いと思います。地理学は、それぞれの地域の特性を明らかにする学問です。日本民俗学においても、地理学的発想の一部の研究者が地域論を展開し、それを地域性論としています。わたしはそれは地域性論とは異なる地域特性論と考えております。全体的な社会文化論の立場ではなくて、個々の地域の民俗や文化の特性を研究していると

考えております。その意味において、最近、社会人類学、社会学、歴史学、考古学、言語学など各分野で活発になりつつある日本全体の社会や文化の地域的差異についての研究が、地域性論であり、これに対して個々の地域を問題にするのが地域特性論であると考えています。この基幹研究「日本における都市生活史の研究」のB班「都市の地域特性の形成と展開過程―近世以降の流通と文化を中心に―」は、地域特性論の考え方にもとづいて、日本の都市を明らかにしようとする学際的共同研究であります。

## (2) 都市の都市性と地域特性

もう一つ概念の問題として、都市の都市性と地域特性の関係の問題があります。都市というものをどのように定義し、どのように研究していくのかは、それぞれの学問の立場によって違います。あるいは、定義をすること自体に興味を見い出さないという議論もありえると思いますが、ここではいち早く都市の研究を開始した社会学の都市概念について検討してみたいと思います。

社会学の都市研究は、一九三〇年代にアメリカのシカゴで開始されました。当時、シカゴは人口が急激増大して社会問題が起り、現在、フロアアメリカン（アフリカ系アメリカ人）と呼んでいる人たちの問題、たとえばギャングの問題や非行の問題などを解決するために、社会学は何をなされるかという問題提起から、シカゴ大学で都市の社会学的研究が開始されました。その代表的な社会学者が、ワース(WIRTH, L.)であります。

ワースは今日社会学者がほとんど引用するような定義をしています。つまり、「社会学の観点からは、都市とは、社会的に異質な人々の、当該時代の当該社会のなかでは相対的に人口量の多い、人口密度の高い永続的な集落と定義される」としています〔WIRTH, L. 1938〕。ここで「永

「統的」というのは、日本語のニュアンスでは持続的とした方がよいと思います。まず人口が多く、人口密度が高く、しかも社会的に異質な人々が構成される集落がワースのいう都市であります。要するに、第一次産業従事者を中心とする農村や漁村に比べて、都市にはさまざまな職業従事者がいて、分業社会を形成しているのが都市です。分業を前提として、さまざまな人々によって構成されているということが、ワースの都市の定義では重要な意味があります。

小林報告でも指摘されましたが、都市社会を研究する立場として都鄙連続体論と都鄙二分論という考え方があります。城廓で囲まれたようなヨーロッパの都市を前提として考えると、都市と農村というのは全く異質な社会であると考えられます。しかし、日本のように「都会」の周辺に「マチ場」があり、「マチ場」と農村の区別がいまいであり、また、農村部が次第に「マチ場」化していくという実態を見ると、都鄙連続体論の方が日本の都市を研究するには相応しいと思います。以前にアメリカの人類学者を志摩の漁村に案内したことがありますが、東海道新幹線の中で、「ずっと家が連続しているではないか」「どこで切れるのか」「どこからどこまでが都市なのか」と聞かれたことがあります。これは日本的な都市と農村の景観であって、都鄙連続体論で考えた方が理解しやすいということをよく示していると思います。

社会学で使う重要な都市概念として、アーバニズム (urbanism) という概念があります。日本では都市的生活様式、もしくは都市性と訳されており、小林報告で議論された「マチ場」の生活は、「マチ場」という農村とは異なる社会の違う生活様式がどうなっているのか、ということ論じられたのだと思います。

ワースのアーバニズムについての議論の内容としては、まず第一に、地域構造の問題があります。都市の地域構造とは、「人口の基礎、技術および生態学的秩序を含む物理的構造」をいいます。例えば、シカゴ独

自都市の地域構造として同心円的な構造があります。中心部に政治的な中枢や経済的な中枢が置かれ、その周辺部に歓楽街が置かれ、さらにその周辺部に住宅街が置かれているという議論です。これは都市における土地利用の地域的分化の構造とも言え換えることができます。第二は、社会組織の問題であります。都市の社会組織は、村落と異なって地縁・血縁という関係が弱体化し、機能的な集団を中心とする社会組織になっています。よく知られているゲマインシャフトとゲゼルシャフトという類型論で言えば、都市はゲゼルシャフトであるとして議論されています。都市の社会関係における匿名性についても指摘されています。第三に、人々の社会心理・意識の問題があります。都市に住む人々の態度・観念・パーソナリティの問題です。この面での都会人の特徴として、ワースはステレオタイプ的な対人態度、寛容、パーソナリティをさらけ出さない行動様式をあげております。

このような都市社会の特徴を示す概念としてアーバニズムが設定されました。また、このアーバニズム論では、生活がますます都市的になるということ「都市化」(urbanization)と言っています。農村の都市化ということとは一般的に言われていますが、都市の都市化もあります。都市的な生活様式を洗練させてますます都市化することが社会学者の議論の中には入っています。先ほどのワースの定義の中で、「当該時代の当該社会のなかでは」とありましたが、都市もますます都市化していくわけです。

これらの議論を踏まえて考えてみますと、この共同研究は二つの班に分けて研究をすすめて行きますが、A班は古代・中世を中心とし、流通・消費から見た都市生活の研究をしています。古代・中世の物価やサービス、あるいは都市の構造ということに焦点を合わせています。都市的な流通や消費の特徴とはいったい何なのかということ、古代や中世の資料(文献史料・考古資料)から明らかにしようとしております。

都市性、アーバンイズムの方に研究の焦点があります。これに対してB班は、利根川から江戸にかけての、江戸周辺都市を対象とし、その地域の都市の地域的な特性は何かに焦点を合わせています。これは都市性の地域的差異に着目した研究であります。つまり、A班は都市性そのものの問題を研究し、B班は都市性の地域的差異を研究しようとしていると考えております。B班の課題である都市の地域特性とは都市性の地域的な差異を意味しております。生活様式が地域的にどう違うかが都市地域特性であります。その差異をもたらず要因としては、その都市の形成過程や展開過程、地理的な位置、周辺地域との関係などが考えられます。対象地域に選んだのは銚子・佐原・野田・関宿・行徳などの利根川流域の伝統的都市ですので、舟運などで江戸との関連の深い位置にあります。また、日本の都市は都市だけで自立的に完結している社会ではなく、周辺の地域とも密接に関わっています。民俗的な共通性も色々ありますし、都市の人口の供給源になっているのが周辺の都市・農村でもあります。とくに女性を都市に供給するという形で周辺の都市・農村が都市と関わっています。逆に都市の商店の取引先として周辺の農村が関係を持つということがしばしばあります。このことはこの報告でとりあげる川越でも佐原でも同じようなことがあります。周辺地域との関係も、地域特性を考えていく上できわめて重要であります。

### (3) 日本の都市社会研究

日本の都市社会研究もかなりの蓄積を持っています。社会学を中心として考えますと、一九五〇年代にはシカゴ学派の人間生態学的な都市研究の影響が非常に強く、都市問題の解決あるいは都市社会病理の解決が重視されてきました。しかし、一方では、これとは別に日本的な都市社会学も生まれてきました。その代表的な社会学者が鈴木栄太郎です。鈴木栄太郎の議論の特徴は、都市結節機関説あるいは正常人口の正常生

活論と言えます(鈴木栄太郎一九五七)。シカゴ学派の研究があまりにも異常な現象、都市の社会病理現象に焦点を合わせたのに対して、鈴木栄太郎は正常な現象、つまり彼のいう「正常人口の正常生活」に着目しました。学生などを除き、仕事をして収入を得ている人を正常人口と定義づけ、それらの人々の正常な生活を明らかにしようとしたわけです。正常や異常という概念は、十九世紀以来のヨーロッパの社会思想の考え方です。また、鈴木栄太郎は、ワースの定義にあるような、都市というのは人口が多く、人口密度が高く、社会的な異質性が高いというだけではなく、都市は人間と人間を結び付ける結節機関であるという考え方をしました。たとえば、都市には映画館・スーパーマーケット・百貨店・学校・大学・博物館などの結節機関が多く存在し、これが都市の特徴であるという議論であります。鈴木栄太郎の都市社会論は、のちに日本の都市社会学の基本となり、大きな影響を与えられました。

一九六〇年代から一九八〇年代にかけて、日本の都市社会学研究が急速に進展します。また、一九六〇年代には、アフリカの都市の爆発的な人口増加にもなっており、アフリカの都市研究が活発となり、都市人類学が誕生します。部族社会から都市社会に多くの人口が移動し、さまざまな部族が一つの都市社会の中で生活するという傾向が顕著になりました。こうして形成された都市社会において、人々の生活がそれぞれの出身の部族の生活とどう関わっているのが研究の焦点になりました。民族性(ethnicity)の研究として都市人類学が生まれました。しかしながら、都市人類学の考え方のなかにも、当初、シカゴ学派社会学と同じように、病理的な発想がありました。こうした都市人類学の影響を受けて、日本においても都市の人類学的研究が活発となりましたが、日本の都市人類学では病理的な社会問題よりも、むしろ都市祭礼や都市の日常生活などに焦点がありました。これは、鈴木栄太郎のいう正常人口の正常生活という視点からの研究であります。また、ややおくられて日本民俗学におい

ても、都市民俗学と呼ぶかは別にして、都市祭礼や団地の民俗などを中心に都市の民俗学的研究に関心が集まってきました。

これらの日本の都市研究の発展によって、都市社会学や都市人類学を中心に、日本各地の個別の都市のモノグラフ的研究がこれまでに多く蓄積されてきました。とくに都市社会学者は、釜石・郡山・浜松・呉などで、いくつかの都市の総合的な都市社会調査を試み、調査報告を蓄積してきました。したがって、これからの日本の都市研究は個別の都市の研究から、つぎのあらたな段階に入る必要があるように思われます。つぎの段階とは、個別都市のモノグラフ的研究をふまえて、日本の都市を比較研究して、都市の一般的な性格を問題にしうる段階であります。この基幹研究の課題に掲げた都市の地域特性の研究には、比較研究が重要であります。比較する材料がこれまでに多く蓄積されてきたと言えるでしょう。たとえば、産業都市について釜石と浜松との比較することによってどういふことが言えるのかという、比較可能なデータが蓄積されてきたと言えます。この意味において、現在は都市比較を通じた都市地域特性の解明の可能性の高い研究段階に至っていると考えられます。この基幹研究を現段階で構想した背景はここにあります。

### ③ 川越の都市社会構造

#### (一) 川越の社会的性格

川越市は埼玉県のやや西部、東京都心から鉄道で約一時間の距離に位置しており、東京近郊の典型的な大都市であります。川越は明治以前に成立した伝統的都市であり、明治以後の日本の産業化の進行とともに発展した近代都市とはさまざまな面において性格を異にしております。すなわち川越は伝統的に九斎市の立つ市場町であり、また川越藩の城下町であり、さらに川越街道に沿った宿場町でもありました。さらに戦後、

東京のベッドタウンとしての性格をも加えて、現在の川越は実に多様な性格を複合した都市であるといえます。現在の川越の中心部の都市区画は慶安年間（一六四八—一六五二年）に松平信綱によって行われた都市計画以来のものであり、侍町・十箇町・四門前の区分や中心部の都市景観は現在でも基本的にはかわっていないかと思っています。しかしながら戦後のベッドタウン化の進行によって、川越の中心は旧十箇町から、東京への通勤に便利な川越駅・本川越駅周辺地区へと南進化の傾向にあり、都市構造もこれにともなって、著しく変化しつつあります。

図は現在の川越の中心部です（略）。川越には色々な鉄道が通っておりますが、何れも旧来の中心市街地を外れております。この図（略）は一九九八年の川越祭りのパンフレットであります。図中の案内所とあるところが西武線の本川越駅です。川越の鉄道としては西武線が最も古いものですが、川越と国分寺に鉄道を敷いて、国分寺で甲武鉄道と結びつけました。そして、JR川越線、東武東上線があります。現在では、東武東上線が最短距離で東京と川越を結んでおります。また、図中の右上に国道294号線のバイパスがありますが、それに沿ってあるのが新河岸川の上流です。この新河岸川の河岸が図の下の方にあります。新河岸川はかつて江戸と川越を結ぶ舟運に利用されておりました。新河岸川の舟運のコースと東上線のコースは近いところにあります。河川改修などによって新河岸川の舟運が衰退すると、東上線がそれに代わっていきます。また、川越街道と呼ばれている国道294号線が中心的な輸送路に代わっていきます。

図中の上の部分に「札の辻」という場所がありますが、ここが川越の旧市街の中心です。この「札の辻」を中心にした地域は「上五箇町」と呼ばれています。その南に「時の鐘」という現在の観光のシンボルがあります。そこから南の部分に「下五箇町」と呼ばれている地域です。「札の辻」を右の方に行くと川越城址があります。川越の総鎮守である

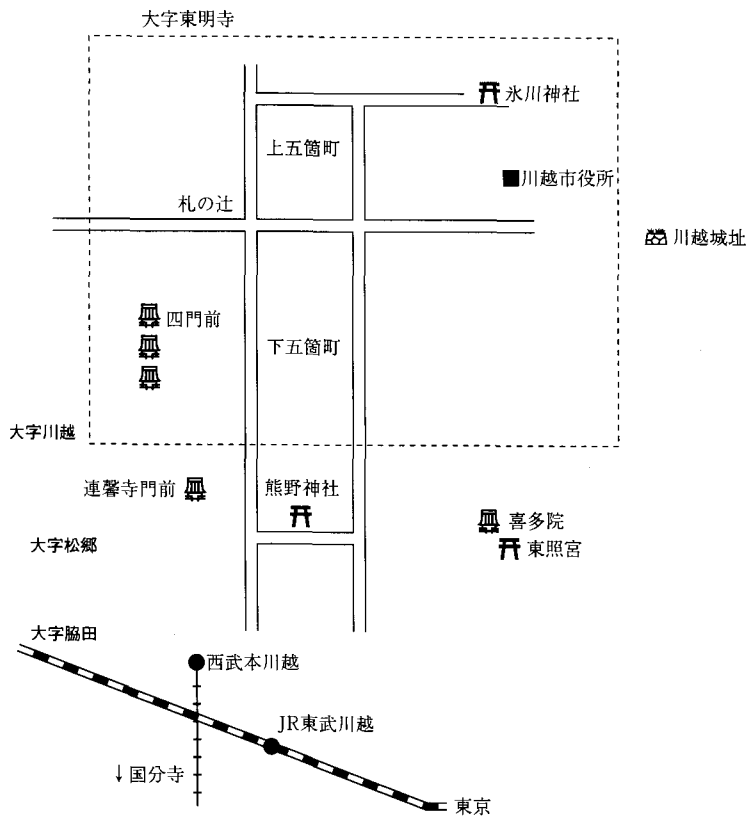


図1 川越中心部の概念図

氷川神社は川越城址の左やや上にあります。ここは大字川越の一番北の外れにあたります。また、川越城址を南に下ると成田山の川越別院、東照宮、喜多院などが集中する地域があり、現在はここが参拝などで賑わう場所になっています。川越の中心市街地は、かつては「上五箇町」と「下五箇町」でしたが、鉄道を敷いたときに中心市街地は外れたこともあって、現在の川越の市街地は南、つまり本川越駅と川越駅を結ぶ地域に移っています。市街地の南進は、近代の川越の都市構造の変化をよく示していると言えます。

川越の地域特性としてつぎの四点を指摘できます。第一は、かつて城

下町であったという特徴であります。基本的には松平の城下町でありました。城下町であったことは川越がこの地方の政治的な中心地であったということの意味し、この地方の結節都市として重要な位置を占めていたといえます。第二は、川越が江戸時代に形成発展した近世都市であるという特徴であります。現在の川越の基礎は、慶安年間に都市計画によって形成されました。都市計画によってそれまで農村であった地域に、川越城、「侍町」、「十箇町」（商人町）、「四門前」（門前町）を区分して近世都市を作りました。現在の川越の中心市街地もこれとほぼ同じであります。つまり、都市計画によって形成された近世の都市景観が現在も基本的に保持されているわけです。図1は、川越中心部の概念図です。「上五箇町」「下五箇町」、「四門前」のうちの三門前を含む、点線で囲んだ部分が大字川越と呼ばれている地域であります。川越という町は、慶安年間の都市計画のときに大字川越だけではなく、大字松郷・大字脇田・大字東明寺という地域を含んで都市が形成されました。もちろん、松平の力によってこのような都市計画が実現したわけです。この概念図は、現在の景観に近い形で作図しましたが、昔はこのような直線道路は通っていませんでした。大字川越の鎮守として祀られているのが、北東に位置する氷川神社です。また、点線で囲った下に連馨寺門前があります。連馨寺門前は古くから「連雀町」と呼ばれてきました。これは「四門前」のひとつですが、大字川越ではなく、大字松郷というところにあります。大字松郷で祀られているのは熊野神社で、大字川越とは鎮守が別になっていますが、連雀町は川越氷川神社の祭祀にあたって早くから山車を出しています。かつては、川の祭祀の山車は、近世には「上五箇町」と「下五箇町」の一〇町だけでしたが、次第に拡大して、熊野神社の氏子である連雀町も出すようになったわけです。氷川神社の祭祀圏は拡大していませんが、秋に行われる祭礼への参加は、現在、南にも北にも拡大しています。近代以降の川越は町村合併を繰り返していきませんが、

現在は、近世の都市計画の外側にあった農村部からも山車を出すようになっていきます。地域の拡大とともに氷川神社祭礼への参加も地域的拡大を遂げてきたわけです。

第三は、川越がこの地方の経済的中心となっていることであり、川越は西南部に広がる畑作地帯と、東北部に続く水田地帯の境界に位置し、九斎市の立つ市場町として両地域の物資の集散地として栄えてきました。第四は、江戸（東京）の近郊に作られた近郊都市という特徴であり、経済をはじめとして江戸とのさまざまな交流の接点になっています。祭礼における山車、店蔵などの商家の構造、あるいは国学の浸透などにおいて江戸の文化の強い影響が認められます。江戸との通行関係や取引関係を通じて婚姻関係が締結され、親族関係が川越と江戸との間で形成されることもしばしばありました。現在、川越は東京池袋まで約三〇キロの距離にあり、鉄道や高速道路による通勤も便利となり、とくに戦後はベッドタウンとしての性格がきわめて強くなって、江戸近郊都市から東京近郊都市に変貌しました。最近では、川越はかつての物資の集散地としての性格よりも、ベッドタウンとしての性格が強くなっているといえます。

### (2) 川越氷川神社祭礼と町内の集団性

次に、「十箇町」を中心に、川越の町内の構造について見ていきたいと思えます。しばしば「上五箇町」は商人町、「下五箇町」は職人町と言われますが、必ずしも断定はできません。『川越市史』近代編の編纂の段階で、両町のうち、「上五箇町」の喜多町、「下五箇町」の鍛冶町を選んで、都市社会の構造を調査しました。

表1は、元禄十一年（一六九八）段階の町内の規模、明治五年（一八七二）の戸数、一九五〇年の世帯数などをまとめたものです。町内の中には小地域組織としてのクミアイ（組合）という組織がありますが、こ

の組合の数も示しました。また、そのつぎに各町内で祀られている神社を示しました。大字川越は氷川神社の氏子になっていますが、さらにそれぞれの町内で神社を祀り、その祭もしています。町内の神社は氷川神社とはとくに関係もなく、氷川神社祭礼にあたって儀礼がおこなわれることもありません。たとえば、「上五箇町」に属する鍛冶町には、鍛冶屋の神とされる金山神社が祀られており、三月十五日に町内の祭、十二月八日にフイゴマツリが行われます。このような町内神社の祭祀は町内の集団性をより強めていると考えられます。最後に川越の祭礼のときに各町内の山車の上で囃子方をつとめる村落名を示しておきました。よく知られているように、川越の囃子は周辺農村がつとめます。この関係は長い間続いているところもありますが、なかには囃子方が変化しているところもあります。

次に、川越氷川神社の祭礼について概観していきましょう。川越氷川神社は大宮氷川神社を分祀したもので、「十箇町」を中心とする大字川越の総鎮守であります。秋祭は十月十四日と十五日に行われていましたが、一九七七年から十月第三週の土日になりました。これは観光化ということが大きく影響していると考えられます。そして、祭礼には各町内から山車が出されます。明治以降、氷川神社祭礼に参加し山車を出す町内は拡大を続けています。「十箇町」「四門前」以外に、明治初年に六軒町（東武東上線の川越市駅の近く）が最初に加わり、一九七〇年時点では二一町内が山車を出しています。氷川神社の氏子範囲の外側、すなわちかつての四門前、町郷分、郷分にも参加町内は拡大しています。つまり、氏子範囲と祭礼範囲にズレが生じたわけです。これは、川越氷川祭礼の都市的拡大といえると思えます。こうした拡大は、明治以降三度にわたって行われた町村合併により、川越の生活圏が飛躍的に拡大したことに関連すると思われる。各町は、氷川神社祭礼にそれぞれの町内単位で参加しますが、一九六一年に全国にさがけて行われた町名地番整理に



表1 川越の町内の概況

町名	元禄11年町内規模	1872年戸数	1950年世帯数	組合	町内神社	囃子	
上五箇町	本町	109	92	170	—	大屋敷稲荷社	川島
	喜多町	166	60	106	6	金比羅神社	福田
	高沢町	110	84	126	6	六塚稲荷社	新宿
	南町	168	114	170	7	雪塚稲荷社	上尾
	江戸町	166	81	131	—	大部屋稲荷社	小中居
下五箇町	志多町	60.3	43	137	15	妙義社	府川
	鍛冶町	63	40	41	3	金山神社	南田島
	多賀町	98	98	128	—	葉師神社ほか	今成
	上松江町	118.3	66	131	10	稲荷神社	大仙波
	志義町	270	119	176	14	烏山稲荷社	中台
		797	1,316				

よって町の内部変化もおきました。とくに中心部の伝統的な町内では、いくつかの町内が統合されてひとつの町に再編される例や、逆にこれまで町内が分断される事態がおきました。たとえば鍛冶町は、ほぼ二分されて北半分は南町と統合されて幸町、南半分は志義町と統合されて仲町となった。旧鍛冶町は「金山会」という会を組織して、伝統的な町内の集団性を維持しようとしているが、祭礼が旧町内単位では行われないので、集団性を維持するには困難な状況となっている。これまで、氷川神社祭礼は町内の集団性を維持・強化する役割を果たしてきましたが、町名地番整理はこうした町内の集団性にとってかなりネガティブな影響を及ぼしたといえます。

祭礼の費用については、祭礼を行う各町内同士、あるいは各町内の家同士の対等性を強調する傾向が強くなっており、かつては商売が繁盛している店がたくさんの祭礼の費用を負担する形をとっていました。この場合、毎年タマというものがその店の景気を見て割り当てられるのですが、もともと平等負担になっている町内もかなりあります。一般的傾向として、とくに最近祭礼が構成員の対等化という変化の中で行われるようになったといえます。

川越の町内の集団性を示す習俗としては、町単位の神社祭礼、町のシンボルとしての山車・人形・囃子などの問題があります。祭礼では現在でも、山車がほかの町内に入るときには、出迎える、送る、あるいは挨拶を行うということが厳格に行われています。また、嫁を迎えたときの町内歩きなど、周辺の村落とよく似たことが川越の町内でも行われています。また、子供の遊び場についても、かつて町内で子供が集団化し、それぞれの町内で子供の遊び場が決まっていたようです。また、町同士の喧嘩もかなりあり、町対町の対抗関係も厳然と存在しておりました。

(3) 周辺地域との関係

川越の町内と周辺農村はさまざまな面で相互的に密接な関係を保持していました。とくに商業経営を通じた両者の関係はとくに強固でありました。その第一は、商家とその下職（職人）との関係としての両者の結びつきであります。この面では、川越周辺の町村はいわば「工場」として川越の商業を支えていたと見ることができます。第二は、川越の商家経営に不可欠な労働力の供給源としての周辺の農村と川越の町内との関連であります。第三に、川越周辺の農村は川越の商家の販売先でもあり、また、川越の商家が周辺の農村の不在地主として、関係することもあったばかりでなく、川越の商家が周辺地域に「暖簾分け」を行う例もありました。いずれの場合をとっても、川越は周辺の農村との密接な

関係を保持しながら、商業経営を営んできたことは明らかであります。

商業経営以外でも、祭礼の囃子方を周辺農村に依頼するとか、周辺農村の女性が商家の嫁の主たる供給源でもありました。また、川越と周辺農村の民俗にはかなりの共通性が認められます。たとえば、町内にあるクミアイ組織は周辺農村にも見られるし、婚姻儀礼における火をまたぐ入家儀礼や、嫁の生家と婚家をつなぐ中宿などの習俗も両者に共通しております。このように川越の町内と周辺農村は緊密な関係にあり、言葉をかえていえば、こうした周辺地域があったからこそ、川越が町として機能しえたといえると思います。

#### ④ 佐原の都市社会構造

##### (1) 佐原の都市地域特性

佐原は千葉県北部、茨城県との境界の利根川沿岸に位置する都市であります。県庁所在地の千葉市から約三〇キロの距離にあり、東京都心からは約一〇〇キロの位置にあります。佐原にはJR成田線が通っており、新宿地区に佐原駅があります。東京への通勤距離としては遠い位置にあります。千葉市の通勤圏には十分に含まれる都市であります。

佐原の都市地域特性として以下の諸点をあげることができます。第一に、佐原は近世にいわゆる在郷町として都市形成された近世都市であることであります。川越のように城下町ではありませんでしたが、それまで農村であったところに形成された都市であります。この意味では川越と都市形成においてかなりの差異があります。第二に、都市形成にあたって重要な意味があったと考えられるのは、物資の集散地としての市場町の形成であります。佐原の新宿地区に六斎市が開設されたのが、天正八年（一五八〇）とされており。新宿はその後、商人町として発展することになります。第三に、その佐原は醤油・酒の醸造を中心とす

る産業都市として発展を遂げます。酒造は寛文年間（一六六一—一六七二）に開始され、また醤油醸造は貞享、元禄年間の一六八〇年以降に開始されます。また、第四に、以後の佐原は川越と同様に江戸近郊都市として発展してきました。ひとつは佐原河岸を通して利根川舟運の一拠点となり、銚子経由で運ばれた東北地方の米を江戸に送る米穀中心の船問屋が多く開業しました。また、酒・醤油などの佐原の産物も舟運によって江戸に運ばれました。江戸との密接な関係はこうした舟運を通して形成され、江戸の文化が佐原にも浸透してきました。「江戸まさり」と称せられる佐原の祭礼の山車にこのことがもともとよくあらわれております。第五に、佐原の都市構造が双分制的な特徴を持っていることでもあります。

図2は、佐原の都市構造の概念図であります。川越とは異なって、佐原は一元的構造を持たず双分制的な構造を持っております。町の中央を利根川に通じる小野川が流れ、ここに河岸が置かれ、物資の流通の中心となりました。この小野川を挟んで佐原は本宿と新宿という二つに大きく区分されます。小野川の西に位置する商人町とされる新宿地区では、神社として諏訪神社を祀り、秋十月に祭礼が行われます。一方、小野川の東に位置する職人町とされる本宿地区では、八坂神社が祀られ、夏七月に祇園祭礼が行われます。夏祭と秋祭はほぼ同じ内容の祭りですが、佐原を二分しておこなわれるところに特徴があります。また、新宿と本宿では人々の気質も違うといわれ、小野川を挟んで二つの地区は競争・対抗し、この対抗関係のなかで佐原という都市が活況を呈してきたという構造になっていたのではないかと考えられます。これはまさに都市における双分制(dualism)的構造に他なりません。

##### (2) 佐原祭礼と町の集団性

表2は新宿の諏訪神社祭礼の山車の変遷を整理したものです。各町はこの祭礼に町内を単位として参加します。諏訪神社祭礼の山車は、歴史

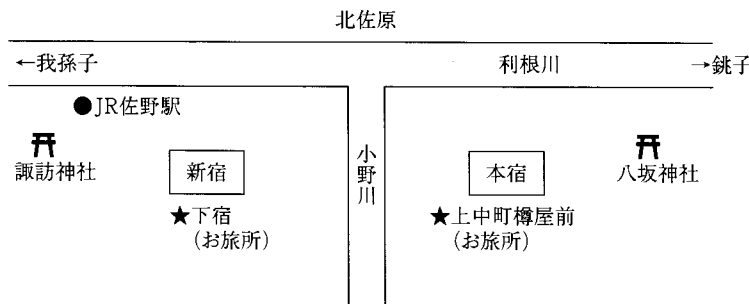


図2 佐原の双分制的構成の概念図

表2 佐原新宿の山車の変遷

	江戸	1860年頃(町誌)	『佐原市史』1966	84	96	1998祭礼
関戸	○	猿田彦	⑫(東)楠正成	○	○	(町内)
	—		⑪(西)瓊々杵尊	○	○	(町内)
上新町	○	破箱を飾る。	⑦諏訪大明神	○	○	鹿嶋(潮来)
上宿	○	三蓋傘鉾	③三蓋傘鉾	○	○	寺宿
上中宿	○	壽老人に鹿	⑤鎮西八郎為朝	○	○	神崎
横宿	○	?	⑨(北)日本武尊	○	○	潮来(与倉)
	—		⑩(南)仁徳天皇	○	○	荒久
中宿	○	鍾鬼	④桃太郎	○	×	
下新町	○	紅木綿の大鯛に恵比須	⑧浦島太郎	○	○	牧野下
上川岸	—	牛天神	⑬牛天神	○	○	新和下
中川岸	—	行平に松風村雨	⑭神武天皇	○	○	佐原
下川岸	—	素戔鳴尊の八頭大蛇	⑮素戔鳴尊	○	○	小見川
新橋本	—	常備屋台無。飾物不定	①小野道風	○	○	野田
下分町	—	常備屋台無。飾物不定	②楠正行	○	○	潮来
下宿	○	常備屋台無。飾物不定	⑥源頼義	○	○	内野

(1984年欄は『房総の祭事』による。上新町は「御幣と禰」)

ります。まず第一に山車を持つ町内が増加したことであります。『佐原町誌』によれば、江戸期に山車をだした町内は八、また一八六〇年頃山車を持つ町内は一三でしたが、現在は一四となっており、近世から近代にかけて山車の台数は増加をつづけており、その構成にも若干の変化があります。山車町内の増加の要因は、祭礼参加の地理的範囲の拡大ではなく、大きな町内の分裂にあります。近世から近代にかけて佐原の町は分裂を繰り返しながら発展してきたと考えられます。近代において確認

と南横宿に、関戸は一九三四年に西関戸と東関戸に分裂して、それぞれが山車を持つようになったわけです。第二に、明治十年以降、祭礼当番に順番の年番制度が採用され、町内間格差の解消に向かっていくことであります。しかしながら、新宿全体で祭礼を行う伝統は現在も存続しており、重要事項はつねに惣町集会で決定されるシステムとなっております。

表2の一番右の欄は、一九九八年時点での各町内の囃子方を示したものであります。町内によって囃子方が固定している町内もあり、また、二〇年前との変化を確認できた例もあります。例えば、上新町の囃子方は潮来だったものが、鹿嶋になっていきます。横宿では以前は与倉に囃子方を頼んでいたが、今は潮来になっていきます。変化も見られることが分かります。また、関戸では同じ町内の人が囃子方をやっています。周辺の農村ばかりではなく、自分のところでも若い衆が囃子方をすると分かります。

的にさまざまな変遷がありました。現在、一四の町内が山車を出して祭礼に参加しております。山車は幣台ともよばれ、もともとは車のうえに御幣を乗せたものと考えられます。山車はそれぞれの町内のシンボルとなっておりませんが、明治初期までは必ずしも山車の作り物が固定してありませんでしたが、明治時代には今日見るのような作り物に固定してきました。山車の人形は、天皇や武将などが多く、いわば近代において各町のシンボルとなったものであります。

新宿諏訪神社の祭祀組織の変化として注目されるのはつぎの二点である

できる例としては、横宿と関戸があります。横宿は一九二六年に北横宿

た。

佐原の祭礼は都市構造の双分制に対応して、本宿と新宿との双分制的構造になっているのが大きな特徴であります。本宿も新宿も祭礼には町を単位として参加し、年番は一定の順序にしたがって町を巡回します。

明治期から昭和戦前までは、十数年つづいて年番をつとめる町内もあつたが、現在は三年ごとに年番をまわしている。祭礼参加の単位として佐原の町内も強い集団性をもっているが、佐原では町内に独自の神社を祀ることは見られません。町内の集団性の上に、さらに本宿、新宿の集団性が顕著に認められるのが佐原の特徴であります。このように佐原では、いわば重層的な集団性ともいべき構造があります。

都市祭礼について佐原と川越と比較してみますと、川越では大字川越の範囲を超えて、祭礼の山車を出す町内が拡大していきませんが、佐原ではその現象は見られません。佐原の中心市街地が新宿と本宿という二つの地域に分かれて、それぞれが諏訪神社と八坂神社の氏子になっているという構造は、近世以来いささかも変化していないといえます。その後、周辺の農村を合併して佐原市が誕生しましたが、周辺地域は祭礼の観客としては加わるとしても、山車を出すという段階にまでは至っていません。拮抗する新宿と本宿の氏子の範囲はかなり厳格で、それ以上の拡大を示さない点で明らかに川越と異なっております。それは、双分制的な都市構造における対抗関係がこのような結果をもたらしていると考ええます。結論的にいえば、川越は氷川神社を中心とする一元的な祭祀構造を持っていますが、佐原は双分制的な祭祀構造を特徴としているといえます。

## ⑤ 結 語——川越と佐原の都市地域特性——

これまで川越と佐原の都市地域特性を神社祭礼を中心に検討をすすめ

てきました、最後両者を比較して結論に代えたいと思います。まず、川

越と佐原を比較すると共通する部分かなりあります。まず、都市の形成について十六世紀後半から十七世紀中葉にかけて形成された近世都市である点で両者は共通しております。また、江戸の近郊都市として成立して、江戸と非常に深い関係にあることも共通しております。両方の都市とも現在、観光宣伝においては「小江戸」と称しています。佐原は北総の「小江戸」をキャッチフレーズにして観光に力を入れています。この点でも両者とも江戸との関係を抜きにして、二つの都市の地域特性を論じることにはできないと思います。また、両者はそれぞれの地域の物資集散の中心をなしています。近世において市場や河岸が形成され、近代になって鉄道が通るなどの点も共通しています。都市構造の変化の部分でも、共通して中心市街地の拡大が見られましたし、また、両方とも町村合併によって周辺の地域を行政地域に取り込んでくる点でも共通しております。かつては、中心市街地と周辺の農村の関係であったものが、一つの都市として行政的には括られるようになりました。また、両方の都市で明治以降、町内運営の対等化が進行していきます。特定の家や町内が特権的に神社祭祀において重要な役割を果たす体制から、町内の対等性と町内の家の対等性を基本とする体制に変化してきました。

周辺農村との関係もよく似ています。祭礼の囃子方などを通じた佐原の町内と周辺農村は密接な関係にあります。経済的にも深い関係（顧客としての農家・下職）にありますし、通婚も行われています。また、様々な民俗においても共通性が認められます。つまり、川越も佐原も周辺農村との密接な関係の上に、都市が成り立っているということも共通した特徴です。特に佐原では、酒造や醤油はそのバックの農村部を前提にしないと考えることができませんし、佐原に酒造が発達したのは、利根川の対岸にある穀倉地帯と密接な関係があると思います。

現在の観光化という点でも共通しています。佐原では、一九九八年十

月の諏訪神社祭礼の際に、駅の近くの文化会館の駐車場に全ての山車を集めて観光客に見せていました。しかも、そこに棧敷を作って色々なパフォーマンスをして、かつての町内を巡行するという形態だけではなく、一堂に会する形で外から来る観光客にも見せるようにしておりました。そして、町内の各地に佐原の土産を売る「お土産広場」を設けていました。両方とも観光にきわめて熱心で、川越も佐原も休日には多くの観光客でにぎわっております。また、川越には蔵造り商家や伝統的な町並み、佐原にも伝統的な町並みがあり、江戸から明治にかけての形成された伝統的な町並みを観光の中心にしていることも両者に共通しております。

一方、共通点ばかりではなく、さまざまな違いもあります。城下町と市場町、支配者の都市計画による都市形成と自発的な都市形成の違いがあります。戦後の川越は急速に東京のベッドタウン化していきます。佐原は都心から約一〇〇キロ離れていてベッドタウン化は緩やかな印象があります。川越の周辺は大きな団地・マンションが林立していますが、佐原の場合は、ベッドタウン化あまり進んでいません。これらの差異のなかで、もっとも大きな差異は、川越の都市構造が一元的構造であるのに対して、佐原は双分制的構造、を特徴としているという点であります。

参考文献

- 千葉県神社庁特殊神事編纂委員会 一九八四『房総の祭り』  
 千葉県香取郡佐原町 一九三一『佐原町誌』(復刻版、一九八三、名著出版)  
 福武直 一九四八『日本農村の社会的性格』東京大学出版会  
 蒲生正男 一九六〇『日本人の生活構造序説』誠信書房  
 NAGASHIMA, Nobuhiro and Hiroyasu TOMOEDA eds. (1984) *Regional Differences in Japanese Rural Culture* (Senri Ethnological Studies 14), National Museum of Ethnology  
 佐原市役所 一九六六『佐原市史』  
 鈴木栄太郎 一九五七『都市社会学原理』  
 上野和男 一九七八『社会』『川越市史・近代編』六一五―七三三頁  
 上野和男 一九八九『伝統的都市町内の家族構成―明治期の川越鍛冶町・喜多町

を中心として―』『国立歴史民俗博物館研究報告』24、一―四二頁

上野和男 一九九一『日本の地域性研究における類型論と領域論』『国立歴史民俗博物館研究報告』35、二四―二七〇頁

WIRTH, I. (1938) 'Urbanism as a way of life', *American Journal of Sociology*, 44.

米山俊直 一九八九『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

(二〇〇二年六月四日受理、二〇〇二年十月十一日審査終了)